

夏の教育セミナー

金沢大学の教育改革と 新しい入試のあり方

Aug. 10, 2018

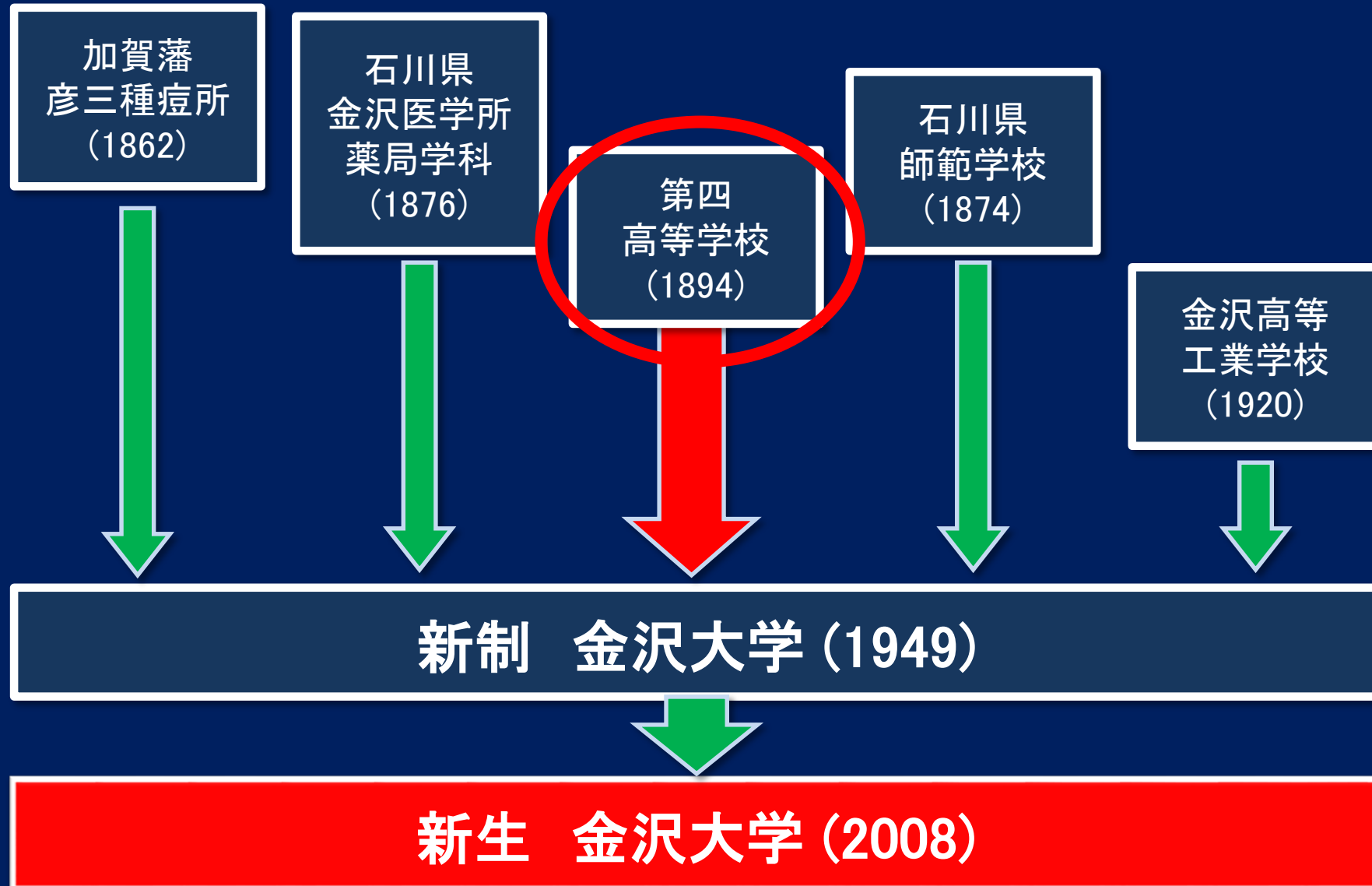
金沢大学教育・法科大学院強化担当理事（副学長）

柴田 正良

1. 金沢大学の歴史と現在
2. 教育改革の方向性とSGU事業
3. 教育の質保証と国際化
4. これからの入試



金沢大学の歴史



3学域17学類 (2018年度～)

人間社会学域

- 人文学類
- 法学類
- 経済学類
- 学校教育学類
- 地域創造学類
- 国際学類

理工学域

- 数物科学類
- 物質化学類
- 機械工学類
- フロンティア工学類
- 電子情報通信学類
- 地球社会基盤学類
- 生命理工学類

医薬保健学域

- 医学類
- 薬学類
- 創薬科学類
- 保健学類

人間社会学域の活動例



マヤ文明の調査研究



心理学実験



法学類生による模擬裁判



教育実習

理工学域の活動例



自律型自動運転自動車



高速・高分解能原子間力顕微鏡



水星探査計画 BepiColombo



モホール・サイエンス

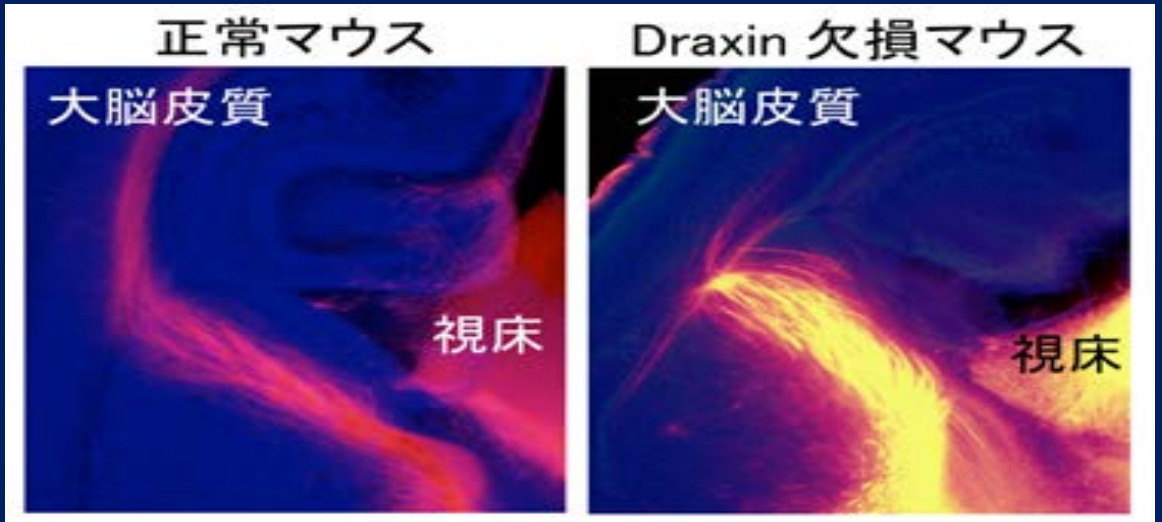
医薬保健学域の活動例



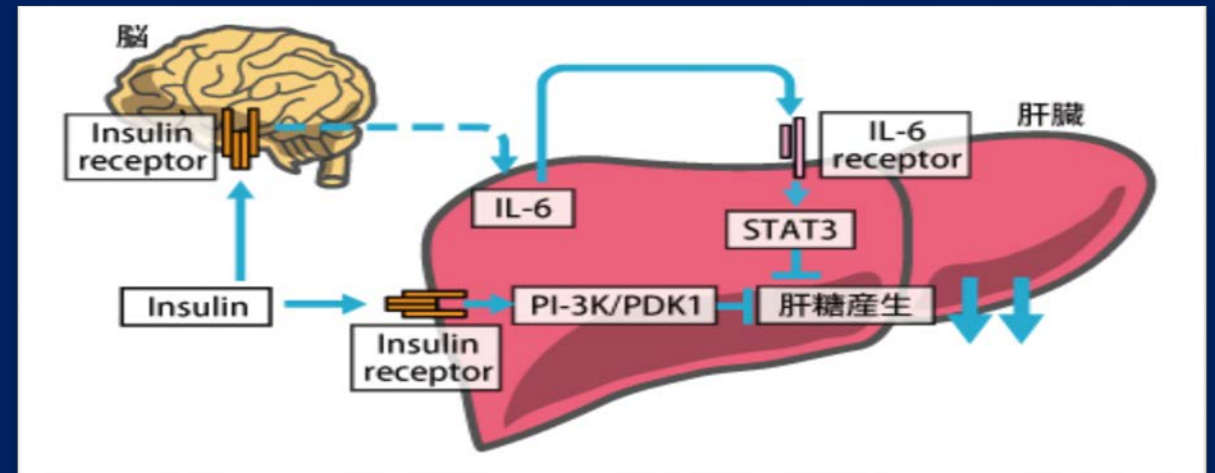
薬の調合実習に取り組む学生



CT撮影の実習に取り組む学生



脳の神経回路が作られる仕組みの解明



肝臓機能と脳との関係の解明

教育の出発点（3つの「ない」がある）

いまでも、ここが解決していない

1. 学生は勉強しない。
2. 先生は中身の濃い授業をしない。
3. 教学マネジメントがない。

平成24年度中教審答申

金沢大学の教育は、現在、3つの課題と格闘している

1. SGUの採択
2. 重点支援：第3類型の選択
3. 入試制度改革（高大接続システム改革）

「金沢大学ブランド」人材の育成を目指す

「金沢大学ブランド」の人材とは、一言でいえば、国際感覚に優れ、世界のどこでも、いつでも活躍できるタフな人材である。

そのような人材の育成を、「教育のグローバル化」と呼ぼう。それを成功させるには、世界で通用するスキルと、それにも増して、志の高さを、学生に染みこませる必要がある。

とくに、学生個人の人生と人類の未来との重ね合わせを可能とする、倫理観と世界のヴィジョンを明確に与えずして、志の高さは学生に生まれえない。

金沢大学の基本理念とSGU事業

金沢大学憲章

基本理念 「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」

教育目標 「専門知識と課題探求能力、さらには国際感覚と倫理観を有する人間性豊かな人材育成」

金沢大学の10年後(2023年)の姿

- 1 独自のグローバル人材育成スタンダード(KUGS)に基づく国際標準の質の高い教育を提供する大学
- 2 世界で活躍する「金沢大学ブランド」の人材を輩出し、日本のグローバル化を牽引する大学
- 3 東アジアの地において、世界の高等教育研究ネットワークの中核に位置する大学

**大学の国際化・グローバル化の
「金沢大学モデル」を確立**

金沢大学憲章



グローバル社会で育成すべき人材像を具体化



金沢大学 <グローバル> スタンダード



各人の立ち位置に課された人類の一員としての自己の使命を国際社会で積極的に果たし、知識基盤社会の中核的なリーダーとなつて、常に恐れることなく現場の困難に立ち向かっていける次の能力・体力・人間力を備えた人材を育成する。

1. 自己の立ち位置を知る
2. 自己を知り、自己を鍛える
3. 考え・価値観を表現する
4. 世界とつながる
5. 未来の課題に取り組む

国際基幹教育院を中心とした、 KUGSに基づく金沢大学ブランド教育の実現

国際基幹教育院の設置(H28.4.1設置)

KUGSに基づく基幹教育を強固に推進

共通教育だけでなく、学士専門課程教育、大学院教育まで
教育全体の高度化と国際化を牽引

GS教育部門	5部門
外国語教育部門	約60名の
国際教育部門	専任教員
リメディアル・基礎科目教育部門	新規配置
高等教育開発・支援部門	



◆共通教育科目を大幅改革

約300科目の共通教育科目を30のGS科目に集約

H28年度 1年次生全員受講(1,763名)

クォーター制の導入(H28.4.1)

共通教育課程 原則完全クォーター制を導入

専門教育課程 セメスター制の特性を残せる柔軟なクォーター制を導入

共通教育の抜本的改革

H27年度まで

H28年度から

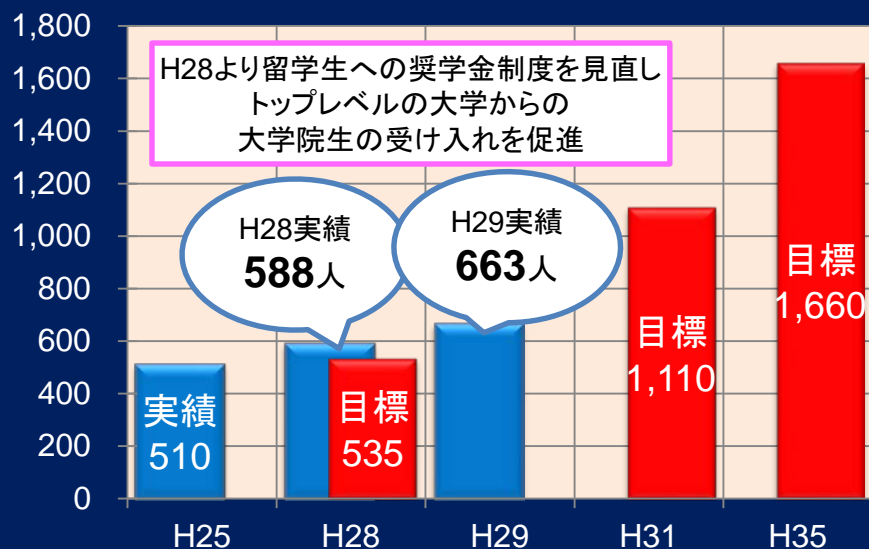
約300科目の共通教育科目 → 30のGS科目に集約

GS科目一覧

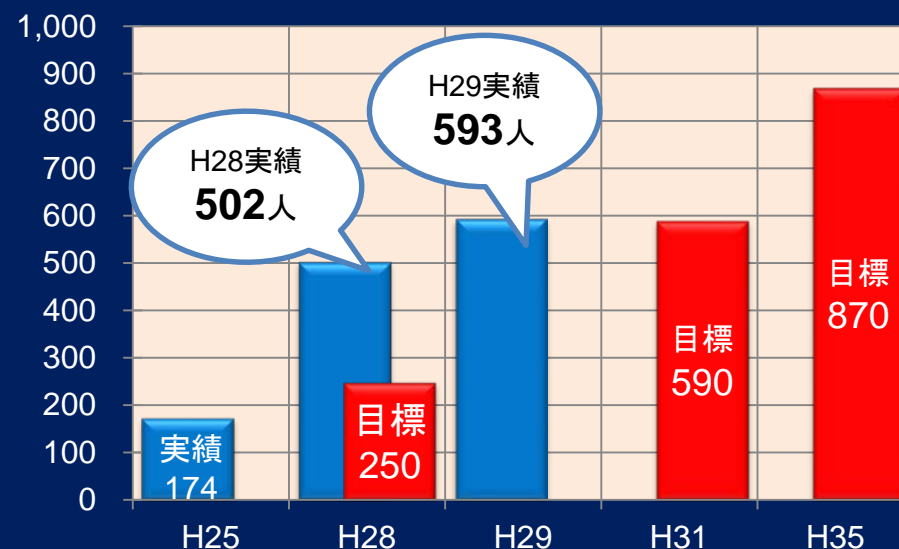
1.自己の立ち位置を知る	2.自己を知り、自己を鍛える	3.考え・価値観を表現する	4.世界とつながる	5.未来の課題に取り組む
現代世界への歴史学的アプローチ	哲学(自我論)	プレゼン・ディベート論 (初学者ゼミⅡ)	金沢・能登と世界の地域文化	科学技術と科学方法論
グローバル時代の政治経済学	パーソナリティ心理学	クリティカル・シンキング	日本史・日本文化	統計学から未来を見る
グローバル時代の社会学	グローバル時代の文学	価値と情動の認知科学	異文化間コミュニケーション	情報の科学
ケーススタディによる応用倫理学	健康科学	論理学から見る世界／数学的発想法	異文化体験	環境学とESD
地球生物圏と人間	細胞・分子生物学	芸術と自己表現	国際社会とボランティア	生活と社会保障
物理の世界／化学の世界	エクササイズ&スポーツ 実技	スポーツ科学	グローバル社会と地域の課題	人権・ジェンダー論

成果指標の達成状況 留学生受入・日本人学生海外派遣

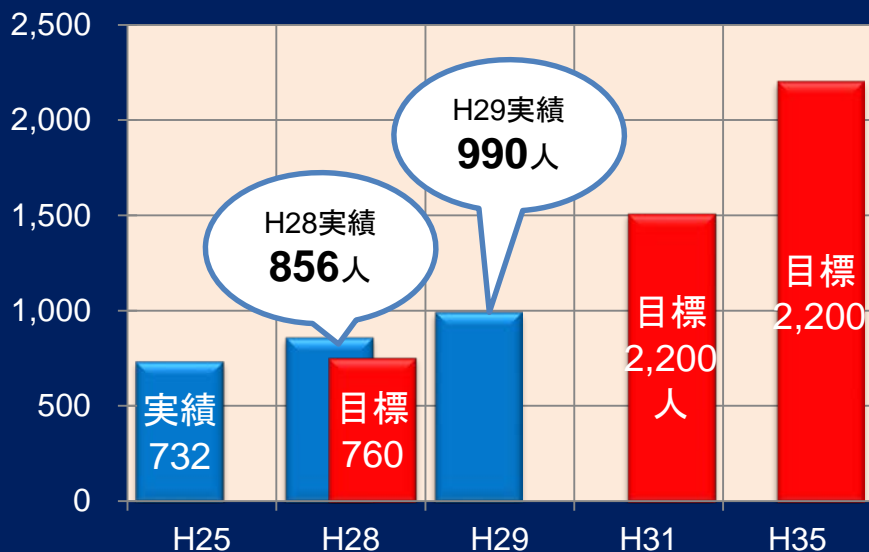
外国人留学生数 (5.1現在)



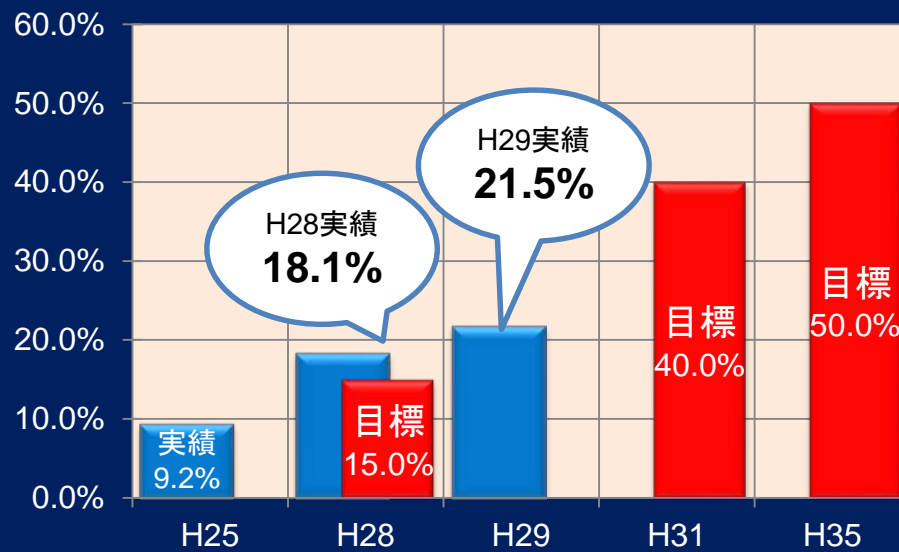
派遣日本人学生数



外国人留学生数 (通年)

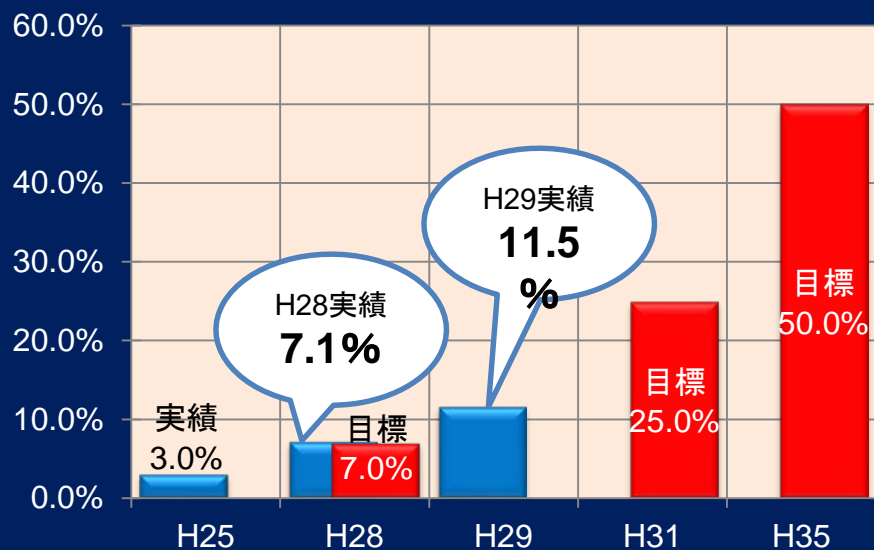


海外経験を有する学生の割合

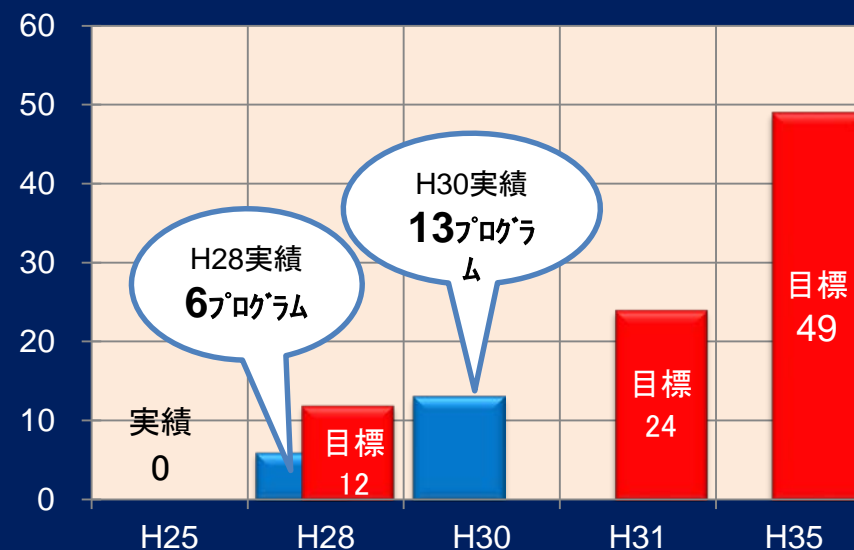


成果指標の達成状況 授業科目の英語化等

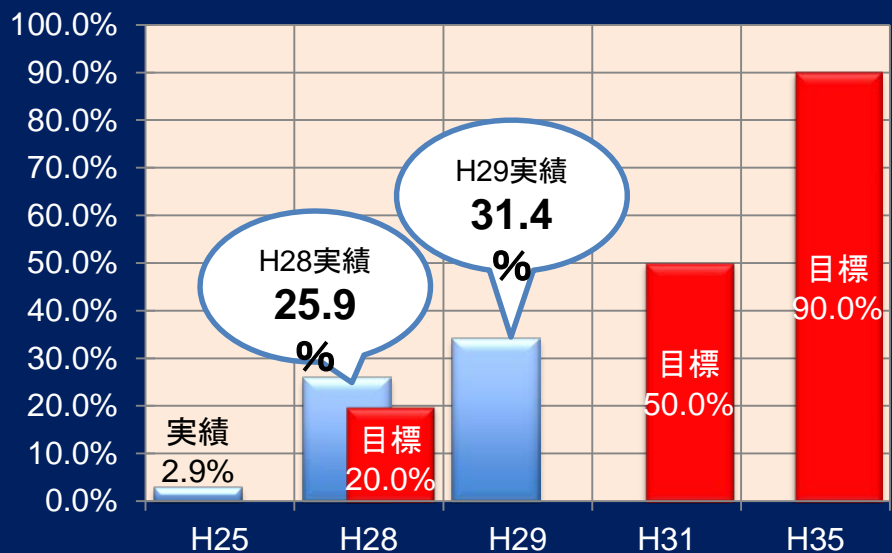
外国語による授業科目(学士)



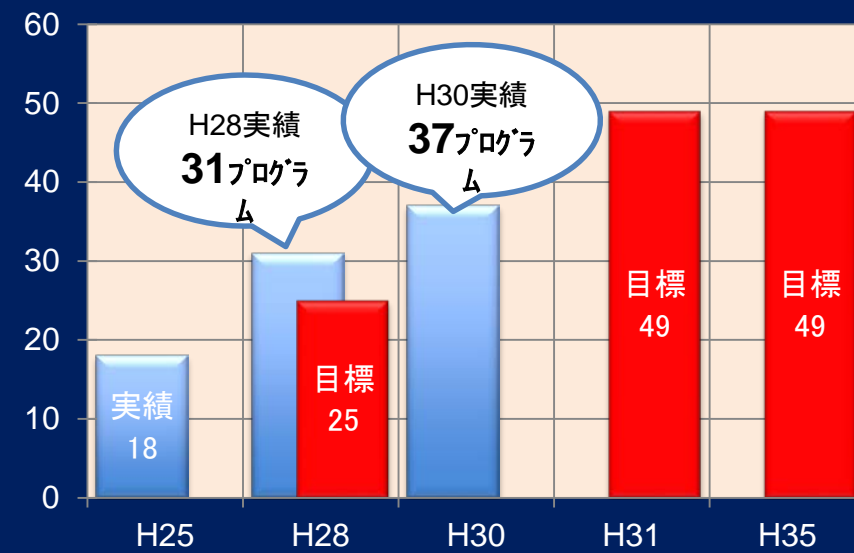
外国語のみで卒業できるプログラム(学士)



外国語による授業科目(大学院)

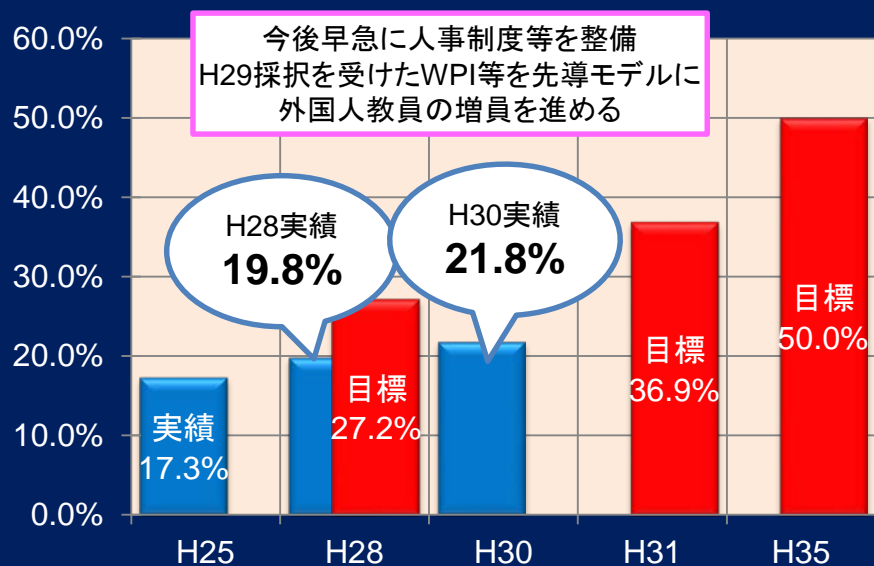


外国語のみで卒業できるプログラム(大学院)



成果指標の達成状況 キャンパス環境のグローバル化

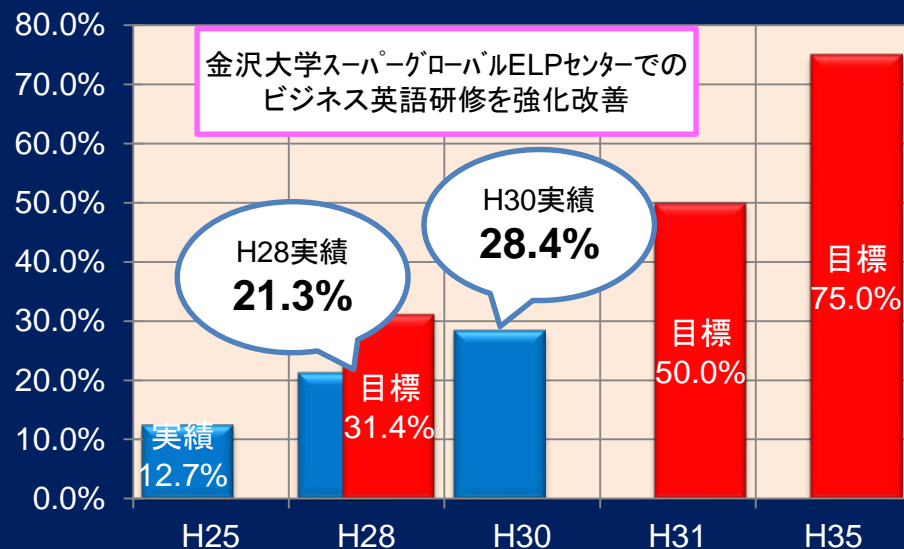
外国人教員等割合



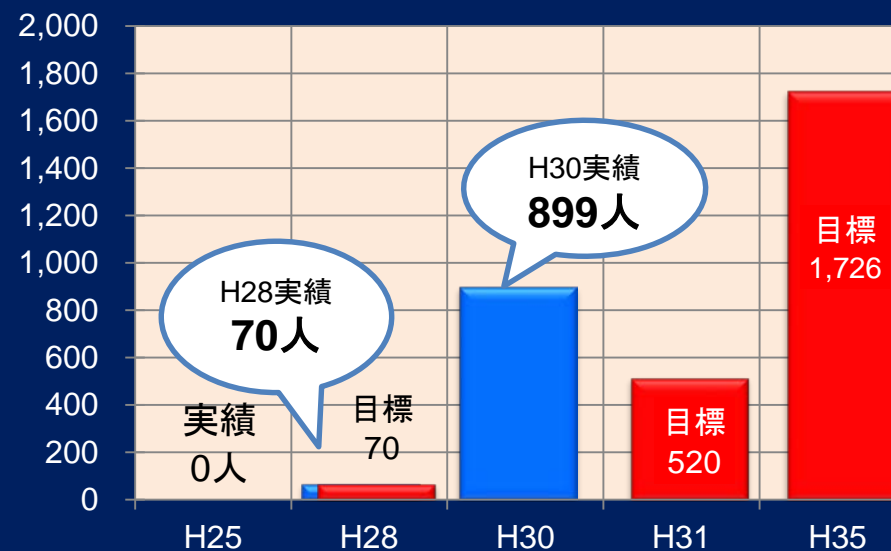
混住型学生宿舎に入居する留学生数



外国語力基準を満たす職員



外部試験の学士課程入試への活用



Goals for 2023 数字で見る！金沢大学の目標

英語による授業

大学院課程

25.7% 100%

学士課程

10.1% 50%
(H29)



日本人学生に占める留学経験者
(単位取得を伴うもの)



593 (H29) 870人
(6.1%) (8.7%)

※日本人学生の総数を1万人と設定

卒業時の学生の語学レベル

TOEIC 760点 大学院課程 85%

TOEFL-iBT 80点 学士課程 75%



卒業までに留学、ボランティア、インターン
シップ等海外での学修経験を持つ学生

381 (H29)
(21.5%)

900人
(50.0%)



※毎年度の卒業生に占める人数と割合

Topic !!

学生のSGU事業への参画 KU-SGU Student Staffの発足


- ◆ SGU事業推進のため、学生スタッフ組織「KU-SGU Student Staff」が発足
- ◆ 20名の学生が所属(学士1年生から博士後期課程まで、留学生も参加)
- ◆ 「学生の立場からの大学全体の意識改革」を目標とする

【主な活動】

- 主に1年生を対象に「留学制度説明会」を開催。毎年100名近くの学生が参加。
- 「グローバルウィーク～君のキャリアアップだけを考えて国際交流フェスタ～」を開催
1週間で400名を超える学生がイベントに参加
- 留学経験者が個別留学相談を行う 「留学なんでも相談かふえ」を開催



SGU事業の今後の課題

- クォーター制の実質化
- 授業科目の英語化推進
- e-ポートフォリオの全学的活用と定着
- 英語のみで卒業できるコース(各学類)の拡充
- 留学の受入と派遣  「量から質へ」の転換

教育の国際標準化を目指す

手厚い学生支援と厳格な成績評価は表裏一体をなす

すでに、バックアップ・ポリシー(BP)の制定と、それに基づくKUGSサポートネットワークは設置した。

あとはその活動の実質化である。

しかし、同時に、学生教育の厳格な質保証なくして、「金沢大学ブランド」はなく、「金沢大学ブランド」なくして、社会からの評価も、海外トップ大学との真の国際交流もない。

現在、最大の取り組みの一つは、教育の質保証の根幹である「厳格・公正な成績評価」の金沢モデルを確立すること。(地味なテーマだが、超重要)

絶対評価という隠れ蓑

1. 大学の成績評価は絶対評価だ、という名目の下、評価の基準が個々の教員の恣意性に委ねられていないか？
2. 絶対評価の基準をどう定めているのかの検証が必要である。成績評価は教員個人のものではなく、一種の公共財である。
3. 評価結果としての成績分布からのフィードバックによる、絶対評価基準(科目ルーブリック)の不断の見直し、これが求められている。

目指すべきは識別力のある絶対評価基準の設定

基準設定の検証・改善
のサイクルを回す



成績評価基準
(科目ルーブリック)

成績分布

大学内の全教員が、
目標となる成績分布
を共有・参照する

科目ルーブリック：
成績評価の各段階に
対応する知識や
能力の程度を記述したもの

試験問題・
課題



これからの入試

1. 「文系後期一括」、「理系後期一括」入試の検証と拡大
2. 独自性ある個別試験の重視
3. 英語能力の重視と、英語外部試験の活用拡大
4. 「KUGS特別入試」と「超然特別入試」の開始
5. 高大接続システムの組織化： GSCの後継組織 → 人社学域と医薬保健学域へ拡大

金沢大学のアドミッションポリシー

金沢大学<グローバル>スタンダード(KUGS)こそ、各学域学類のアドミッションポリシーの源泉たる、大学全体のアドミッションポリシーである。

「本学は、各人の立ち位置に課された人類の一員としての自己の使命を国際社会で積極的に果たし、知識基盤社会の中核的なリーダーとなつて、常に恐れることなく現場の困難に立ち向かっていける能力・体力・人間力を備えた人材を育成する。」
(KUGS)

すなわち、金沢大学は、このKUGSに適う資質と能力の開花を少なくとも確かな可能性として示すだけでなく、なによりも、このような人材になろうとする高い志と強い気概をもった人物の入学を期待しています。

金沢大学の今後の入試方針（Ⅰ～Ⅳ）

Ⅰ． 本学独自の入試方式や入学者対応（高大接続組織や入学前教育、等）によって、本学の独自性・優位性を際立たせる

- ・従来のいわゆる「知識の記憶とその再生」を主眼とする試験方式は、その単一の「物差し」によって、あたかも大学全体の実力を測るかのような誤解を生んだ。したがって、他の「物差し」を独自に開発し、それによって本学のユニークさをアピールすると共に、入学者の多様性を確保することが重要である。

金沢大学の今後の入試方針（Ⅰ～Ⅳ）

Ⅱ. 従来の「物差し」による序列化（ランキング）からの離脱 をできるだけ可能とするような入試方式を採用する。

- ・入試の偏差値による富士山型の序列化（ランキング）への過信は、大学における成績評価のズサンさと相まって、「入学者の能力を卒業までにどこまで伸ばしたか」という大学の教育本来の存在意義を無に帰してしまう。
- ・本学独自の入試方式を従来とは別の「物差し」として機能させ、それが社会に受容されて初めて、「金沢大学ブランド」は確立する。
- ・それは、八ヶ岳型（多峰型）の大学群が存在し始める端緒であろう。


金沢大学の今後の入試方針（Ⅰ～Ⅳ）

Ⅲ. 一般入試及び特別入試において、基礎学力をできるだけ担保する（同時に、例外となる入試方式とそれへの対処を万全とする）。

- ・特別入試の割合を、相当程度まで、徐々に無理なく拡大する。
- ・基礎学力は共通テストと個別試験で担保する。その際、個別試験における「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」の評価は、共通テストの「無駄な再現」とならない内容とレベルとする。
- ・また、大学及び各入試区分のAPに従い、個別試験において、「主体性・協働性」の評価を個別試験において行う。

金沢大学の今後の入試方針（Ⅰ～Ⅳ）

Ⅳ. 全学及び各入試区分におけるAPとできるだけ整合的な入試方式・入試内容とする。

- ・本来、入試の方式と内容は各入試区分のAPから導出されるべきものである。しかし、従来の「物差し」では、実際のところ、一般入試ではほとんどAPは忘れ去られている。科目の種類と配点を除けば、「高偏差値  APとの合致」という構図。
- ・したがって、各APを根拠に、従来とは異なる独自の入試方式・入試内容を開発し、本学独自の「物差し」を社会に提供する。

前期・後期2回の受験機会を 戦略的にどう考えるか

- ・受験生にとって、受験のチャンスを広げられる(後期)前提が、合格のチャンスを狭められること(前期)なのは、客観的に見て、それほど歓迎すべきことか？
- ・結局、一種の「敗者復活戦」でしかないなら、偏差値という「物差し」による序列化の徹底化しか導かないだろう。後期入試で前期と大きく異なる選抜方式を採らない限りは。
- ・受験機会の複数化は、本来、異なった「物差し」による試験方式の複数化においてこそ意味があるのではないか。
- ・競争がある以上、受験機会をどれほど増やそうと、全ての受験生が希望の大学に入れるわけではない。

KUGS特別入試

- 高大接続の新しい試みとして、2020年度からの導入を検討
- 一発勝負のペーパーテストでは測れない受験生の資質や能力を、じっくりと時間をかけて見極める入試
- 受験生は、本学が準備する一連の「KUGS特別セミナー」、「実習」、「ラウンドテーブル」などの体系的プログラムに参加し(遠隔参加あり)、レポート等を提出する。
- 受験生の成果や発表を、最大限に重視する入試

日本数学 A-lympiad

日本数学A-lympiad委員会(本学主管)は、日本で初めて成績優秀チーム(2チーム)をオランダで開催される国際数学コンクール「Math A-lympiad」に日本代表として推薦・派遣します。

このコンテストは学力の3要素「知識・技能」、「思考力、判断力、表現力」、「主体性・協働性・学ぶ態度」のバランスの良い育成、英語運用能力の充実等とも合致しています。

また、今後、共通テストで重視される「数学を活用した問題解決に向けて構想・見通しを立てる能力」を、競うコンテストでもあります。



同じ高校の3~4人がチームとなって競い合う

pixta.jp - 19667145

超然文学賞



言葉について特異な才能を持ち、日々その才能を自ら磨き、将来「言葉の力」で世に出ることを強く望んでいる高校生に告ぐ

長らく「文学は古い。文学は無力、文学が現実は何になる。」という功利的な風潮が蔓延し、高貴な光を失ったように思われてきた文学でしたが、ふと気づくと「文学こそ人間が輝く場所」と確信される時代が静かに来ていました。

金沢大学の前身校、旧制高等学校「四高」は、軽薄な風潮を排した「超然主義」を掲げ、多くの優れた文化人、文学者を輩出しました。

西田幾多郎、鈴木大拙、中野重治、井上靖、・・・

応募は2部門：

「小説」部門

「短歌」部門

ご清聴ありがとうございました

金沢大学はこれからも
バイリンガル・キャンパスの構築を通して
個性豊かな
真のグローバル大学を目指します